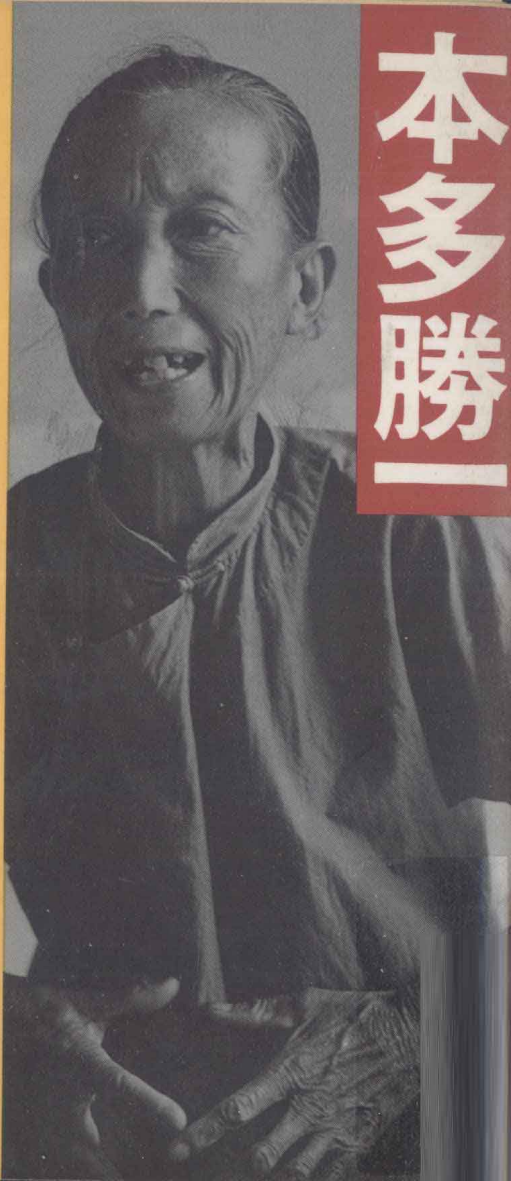
# 中国の旅

本多勝一



本多勝一（ほんだ　かついち）
1933年長野県生まれ。現在、新聞記者。
著書『カンボジアの旅』（朝日新聞社）
　　『そして我が祖国日本』（すずさわ書店）
編書『ペンの陰謀——山本七平式ペテンの技術』（潮出版社）

中国の旅

昭和56年12月20日　第1刷発行　　定価 400円

著　者　本多勝一

発行者　初山有恒
印刷製本　凸版印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
〒104　東京都中央区築地 5-3-2
電話　03(545)0131（代表）
編集＝図書編集室　販売＝出版販売部
振替　東京 0-1730

©本多勝一　1981　Printed in Japan
0136-260805-0042

# 中国の旅

本多勝一

朝日新聞社

表紙・扉　伊藤鎮治

目次

中国人の「軍国日本」像 16
旧「住友」の工場にて 39
矯正院 48
人間の細菌実験と生体解剖 57
撫順 87
平頂山 95
防疫惨殺事件 119
鞍山と旧「久保田鋳造」 133
万人坑 147
蘆溝橋の周辺 178

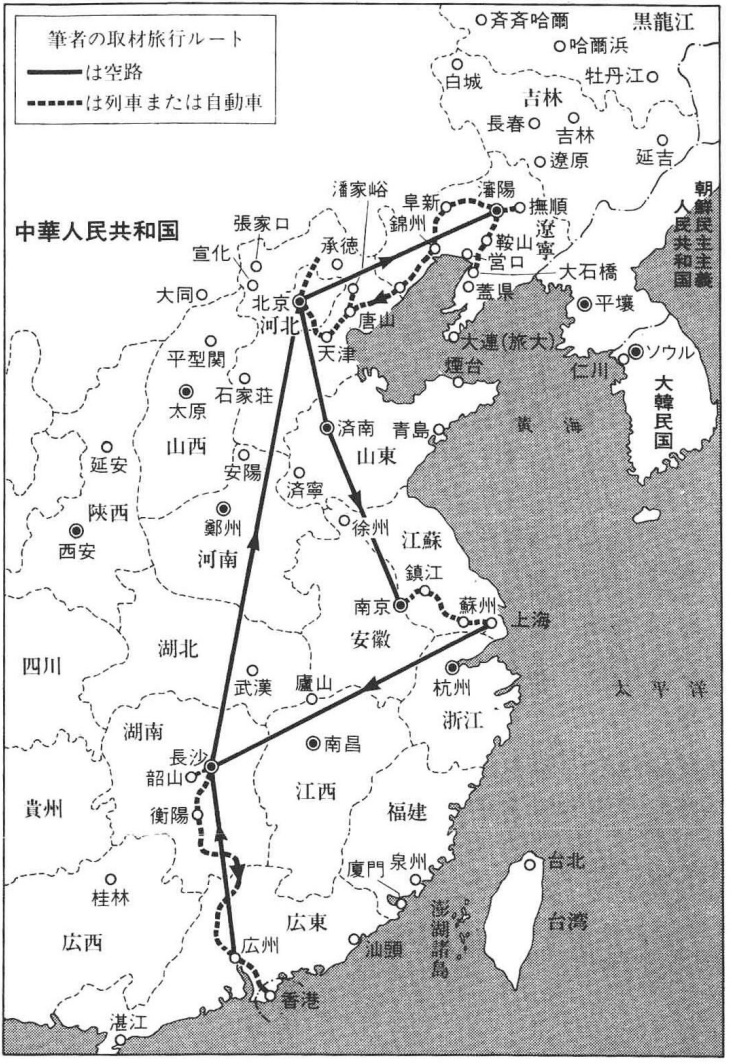
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

強制連行による日本への旅　188
上海　197
港　214
「討伐」と「爆撃」の実態　220
南京　225
三光政策　267
あとがき　298
解説（高史明）　303

写真　本多勝一
図版　吉沢スタジオ

# 中国の旅

ローマ人は破壊・殺戮・掠奪をあやまって支配とよび、廃墟を作ったとき、そこを平和と名づける――カルガクス（弓削達・訳）


筆者の取材旅行ルート
は空路
は列車または自動車
中華人民共和国
黒龍江
斉斉哈爾
哈爾浜
牡丹江
白城
吉林
長春
吉林
遼原
延吉
潘家峪
阜新
瀋陽
撫順
錦州
遼寧
鞍山
営口
張家口
宣化
承徳
大石橋
蓋県
大同
北京
唐山
平壌
河北
天津
大連(旅大)
煙台
ソウル
仁川
平型関
石家荘
太原
大韓民国
済南
青島
黄海
山西
山東
延安
安陽
済寧
陝西
鄭州
徐州
西安
河南
江蘇
鎮江
南京
蘇州
上海
安徽
四川
湖北
武漢
廬山
杭州
太平洋
浙江
湖南
長沙
南昌
韶山
江西
貴州
衡陽
福建
厦門
泉州
台北
桂林
澎湖諸島
台湾
広東
広西
広州
汕頭
香港
湛江

一、数字の表記は万進法（日本式）とし、千進法（西欧式）を排します。たとえば——

× 五〇三、九八七、一四六円　　× 503,987,146円
○ 五、〇三九八、七一四六円　　○ 5,0398,7146円
○ 五億〇三九八万七一四六円　　○ 5億0398万7146円
× 五億〇、三九八万七、一四六円　　× 5億0,398万7,146円

（理由は拙著『貧困なる精神・第1集』〈すずさわ書店〉収録の「数字表記に関する植民地的愚挙」参照。）

二、人名はすべてその人物の属する国の表記法の順序そのままで使います。たとえばイギリス人やフランス人は「名・氏」の順ですが、日本人や中国人やベトナム人は、たとえフランス語やイギリス語の文中であっても「氏・名」の順です。現に中国も韓国もカンボジアもこれを実行しています。（理由は『貧困なる精神・第11集』の「あとがき」参照。）

三、The United States of America は「アメリカ合州国」と訳し、「合衆国」とは書きません。（ただし、「合衆国」が誤りだと主張するわけではありません。理由は拙著単行本『アメリカ合州国』〈朝日新聞社〉の〈付録3〉参照。）

四、ローマ字は日本式（いわゆる訓令式）とし、ヘボン式を排します。（理由は『貧困なる精神・第9集』収録の「ローマ字は日本式でなければならない」参照。）たとえば——

shi→si, shō→syo, chi→ti, tsu→tu

五、外国語のわかち書き部分をカナ書きにする記号は、ナカテン（・）を排し、二重ハイフン（＝）とします。（理由は拙著『日本語の作文技術』〈朝日新聞社〉第四章で述べた使用法と分かち書きとの混用を避けるため。）たとえば——

× ホー・チ・ミン、ジョン・F・ケネディ、毛沢東の三人
○ ホー＝チ＝ミン・ジョン＝F＝ケネディ・毛沢東の三人

# 中国の旅

北京空港に着陸したのは夜の七時近かった。雷雨の直後なので涼しい。朝日新聞社北京支局の秋岡家栄記者のほか、中国側の日本特派員として東京にいた蔣道鼎記者、中国国際旅行社の李乗傑さんや、二人の在北京日本人記者などが出迎えてくれた。空港から都心の宿舎「新僑飯店」（ホテル）まで車で約四〇分。夜道の両側に、ヤナギらしい並木が延々とつづく。北京市内にはいると、かつて見た世界のどの都市にもなかった広大な道路が、一直線に中央を貫いている。「長安街」通りだ。道幅は一二〇メートルあるという。街灯に照らされた道路と両側のビルとの間に、さらに余裕がとってあるから、通りは一層広く見える。午後九時を過ぎているせいか、車がほとんど通らないので、長大なグラウンドを走っているような気分になる。ホテルに着くと、私たちは秋岡記者とともにまず中国のマオタイ酒で乾杯した。

香港から中国入りした私たち――『朝日新聞』の古川万太郎記者と私は、広州・長沙を経て一九七一年六月一四日、こうして北京に無事到着した。私たちはかつて一度も中国をたずねたこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

はない。古川記者と私は、七〇年暮れから七一年の初めにかけ、それぞれ別の取材目的を抱いて入国を申請していた。入国承認の電報が来たのは七一年五月一五日であった。この一ヵ月ほど前から、いわゆる「ピンポン外交」に始まる中国の外交政策、日本側の対中なだれ現象が始まっていたが、私たちの取材動機はしたがってこうした現象とは直接の関係はない。

北京についたあくる日、外交部新聞司を訪れた。責任者の新聞司副処長・馬毓真さんに取材目的を説明して協力を依頼する。私の訪中目的は、すでに入国申請のときから中国側に知らせてあったように、戦争中の中国における日本軍の行動を、中国側の視点から明らかにすることだった。それは、侵略された側としての中国人の「軍国主義日本」像を、具体的に知ることでもある。とくに日本軍による残虐行為に重点をおき、虐殺事件のあった現場を直接たずね歩いて、生き残った被害者たちの声を直接ききたいと考えた。戦後二六年すぎた今の時点で、こうした取材を思いたったおもな理由は、ほぼ次の五点に要約できる。

①日中の正式国交が、かくも長いあいだ断絶したままでいることの異常さ、国交回復の重要さについては、改めていうまでもない。だが日中国交を問題とするとき、中国に侵略した日本の過去について、日本側がもし不問のまま、責任ある何の具体的態度も示さずにのぞむとすれば、好ましい進展はとうてい期待できない。日本政府はこの点について過去二六年間、ついに一度たりとも何らかの調査なり公式態度の表明なりをしたことがなかった。またマスコミュニケーションにおいても、これを真に正面からとりあげ、それに応じた質と量とをともなう記録として国民に知らせる努力をしたとは考えられない〔注1〕。これは日本のすべてのジャーナリズムの責任でも

ある。

②その結果、中国人が千何百万人も殺されたというような事実を、一般の日本人は噂ていどに、抽象的にしか知らず、中国侵略とは具体的に何であったかも気づかず、それが結局は、たとえば靖国神社国家護持運動のような、歴史の歯車を逆転させようとする力によって利用される結果にもつながってゆく。

③ベトナム戦争で、米軍はソンミ事件やバランアン事件などにみられるような大虐殺をつづけているが、その報道に対して、日本の一部には「報道されるだけ、さすがにアメリカは立派だ」という論議があった。「さすがに立派」かどうかは一応別問題として、日本の報道がそのようではなかったこと、二六年すぎてもまだそのままになっていることは事実である。ソンミ事件の報道に感嘆するよりは、実践したほうがよい。

④「広島・長崎」はもちろん、たとえば「東京大空襲」などのように、最近日本人の被害者としての告発・記録運動が盛んに行なわれている。これはこれでもちろん重要だが、それにも増して重要なのは、侵略したアジア諸国に対する加害者としての記録ではないか。日本の同盟国だったナチス＝ドイツによる加害記録は、日本でもたくさん出ているが、当の日本軍のものがない。

⑤中国は「日本軍国主義が復活した」として、極度に警戒している。しかし日本人のなかには、なぜこれほど中国が神経質なのか理解できない人も多い。中国人が日本の軍国主義復活を警戒する歴史的・心理的背景には、戦争中の日本軍の姿が黒々と横たわっている。中国人にとっては、「日本軍国主義」は抽象的な言葉や数字ではなく、自分の肉親が殺され、家を焼かれた具体的風

景なのだ。どんな風景なのかを少しでも日本人が理解すれば、今の中国の警戒心も理解することができるであろう。

戦後二六年すぎた今、こうした取材をすることについて、一部には「いまさら」と考える日本人がいることも知っている。だが以上のように考えると、むしろ「いまこそ」やらなければならないことではないかと思う。敗戦直後よりも、この今が一番やるべきときではないかと。虐殺の被害者が忘れようとすることは自由だ。しかし虐殺した側の国民が忘れることは、犯罪の上ぬりにほかならぬ。

馬さんはこちらの要求をほぼ全面的に認めて協力を約束した。この二〜三日後、出張先から北京に帰った直接担当の王振宇さんが、現地との連絡をとりながら準備をすすめた結果、まず東北地方（日本占領中のいわゆる「満州」）から取材を始めることになり、六月二四日朝の飛行機で瀋陽に向かった。瀋陽といわずに、日本の占領時代まで使われていた旧「奉天」といえば、すぐわかる日本人も多いであろう。

瀋陽の空港には、遼寧省革命委員会外事係の賈云さんら五〜六人が出迎えた。空港から市の中心に向かう車の中で、外事係の人たちが説明した――「このあたりは日本人ばかり住んでいたところです。この通りはその中でも特に支配階級や官僚などが住んでいました。ここは日本人労働者のアパートでした……」

私たちは大きな広場をのぞむ遼寧賓館に案内された。かつて「満鉄」の大和ホテルだったという。部屋の窓から見る広場の中央に、人民解放軍と毛主席の巨大な像が立つ。ここは「紅旗広

場」と呼ばれていた。

私たち二人は共に東北地方へ来たが、古川記者は主としてプロレタリア文化大革命後の中国の姿を取材し、私は旧日本軍による虐殺の現場をたずね歩くため、行動はほとんど別々だ。私の取材には、遼寧省革命委員会外事係の一人・単用有さん(四七歳)〔注2〕が通訳を引き受けることになった。一九二六年(大正15)八月生まれの単さんは旧「満州」時代の大連で育ったため、日本語を完全に話すだけでなく、当時の日本軍と日本人についても体験的にくわしい。通常は革命委員会の仕事をしているが、こんな事情もあって私の通訳を臨時に引き受けることになったのであった。

遼寧賓館では、私たちに関する責任者としての外事係主任・王幼泉さん(四四歳)が、まず歓迎の挨拶をした。王さんは人民解放軍として国民党軍との内戦に加わり、さらに朝鮮戦争では米軍とも戦っている。挨拶の中にこんな言葉もあった——

「私自身が日本帝国主義による一四年間の支配を体験して奴隷化教育も受けましたから、今こうしてお二人にお会いしますと、昔を思いだして何となく気持が落ち着かないものもあります。けれども当時やってきた日本人の労働者・農民のなかには、個人的にはたいへん親しくなった人民もいました。労働者や農民同士の多くは親しかったのです。憎いのは日本帝国主義でした。学校でも、怒りっぽくてずるい先生がいて、私もなぐられたことがありますが、中には中国人にやさしい先生もいました。いまの日本には『ああ満州』という回想集や『山本五十六』のような反動映画を作って、旧侵略者を美化しようとする一部反動勢力があることはよく知っています。私た

柳条溝の日本軍砲撃第一発の着弾地。中央のコンクリートは倒された記念塔。立て札に「日本軍国主義侵華的鉄証」の文字が見える。

ちとしては不安にならざるをえませんが、しかし今の日本はまた決して、当時の日本ではないことも知っています。日本人民の強力な平和運動には心から敬服し、学ばなければならないと思っています」

瀋陽に滞在中、あの柳条溝もたずねた。中国では「九・一八事変」とよび、日本では「満州事変」とよぶ日中戦争勃発の現場だ。こんどの九月一八日はその四〇周年記念日に当たる。一九三一年九月一八日夜、ここで日本軍は満鉄線路を爆破し、ベトナムで米軍がトンキン湾事件をデッチ上げたのと同じ手法で、これを張学良軍のしわざとして攻撃開始した。

日本軍はその後、柳条溝の砲撃第一弾の着弾地点に記念塔を建てた。中国側からみれば、これは中国公然侵略第一弾でもある。日本敗戦の一九四五年八月、付近の中国人大衆が押

しかけて、このコンクリートの記念塔をひっくりかえした。横倒しになった塔のそばには日本軍国主義を糾弾する立て札があり、周囲の柳林でセミが間断なく鳴きつづけている。すぐ裏の二〇〜三〇メートル離れた問題の線路を貨物列車が通過した。

〔注1〕10ページ　過去のマスコミュニケーションにとりあげられたものに、光文社のカッパブックス『三光』（一九五四年）があるが、これは撫順の収容所にいた日本の戦犯の告白を中国側が整理した資料の一部であって、日本のジャーナリズムによる自主的作業ではなく、内容には中国での大きな虐殺事件の舞台があまり登場していない。にもかかわらず、これを当時刊行した出版社の勇気と良識は高く評価さるべきだったが、まもなく右翼の脅迫によって絶版とされた。最近この本は『侵略』と改題して中国帰還者連絡会（正統）により新読書社から刊行されている。

〔注2〕13ページ　本書に出てくる中国人の年齢は、中国の慣習にしたがって、とくにことわりがない限り、すべて数え年とした。したがって満年齢はこれより一歳か二歳少ない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong